

## カトリック浦上教会について

鉄川 進

現在のカトリック浦上教会について語る場合、被爆し破壊された旧教会堂のことについてふれないわけにはいかない。なぜなら現教会は構造形式こそ違え、規模・様式・デザインを含め旧教会堂をほぼ復元したものと言えるからである。

旧教会堂はフレノ師の指導により、旧庄屋高谷氏の屋敷跡に1895年から1914年の長きにわたり建設された、木骨煉瓦造の教会である。ローマカトリック教会の様式に則り、ナルテックス（前室）を西側にアプス（祭壇）を東側に配置する。内部構成は袖廊（両側に張り出した部分）を持つ三廊式バシリカ型教会でリブヴォールト天井を備え、（写真1）重層の瓦屋根を葺いている。外部は煉瓦を化粧で見せ、クリアストーリー（高窓）部分は下見板貼りである。

さて、この教会堂は1914年の献堂の時点では双塔が存在しなかった。（写真2）完成するのは1925年で、鉄川与助の手によるものである。（写真3）煉瓦造の鐘楼部分の上に鉄筋コンクリート造の八角形のドームを載せている。この時点でフレノ師はすでに亡くなれており、増築部分の意匠については、ほぼ同時期に献堂された手取教会堂（写真4 1928年）の鐘楼のデザインとの近似性をみても、与助のものと考えてよいだろう。この鐘楼ドームは現存し、「長崎原爆遺跡」の一部として国の史跡となっている。（写真5）

戦後再建された教会堂は、1959年5月に竣工し同年11月に祝別された。構造規模は鉄骨鉄筋コンクリート造一部鉄骨造3階建て延べ面積1,895㎡であり、設計は鉄川工務店一級建築士事務所の鉄川与八郎、施工は株式会社鉄川工務店である。外部はコンクリート下地モルタル塗りにセメント瓦葺きで建具はスチール製、内部はモルタル壁に両流れの傾斜天井とかなり簡素な仕上げとなっている。（写真6、図1～2）旧教会堂については2004年に当時長崎総合科学大学の助手であった松尾有平氏が、写真や資料をもとに詳細な復元図を作成している。（図3～4）これを図1～2と比較してみれば基本デザイン、ファサード、棟の高さ、外壁位置がほぼ同じであることがわかる。違っているのは次の3点である。まず双塔の高さが5mほど低くなっているが、これによって旧教会堂ののびやかなプロポーションが若干失われている。次に三廊式の内部構成が単廊式に変更され、それに伴い屋根が単層になり、クリアストーリーが廃されて薔薇窓が単独になっている。最後にアプス部の隅切りがなくなっている。後の2点の相違については、現代における教会建築様式の変化によるものと考えられる。

現在の教会堂は、この教会堂に対し1980年に大規模な改修を行ったものである。外壁には煉瓦調のタイルが貼られ、内部には疑似ボールド調の天井が造られたが、特にファサードにおいて旧教会堂の印象を伝えていた窓の多くが廃され、ややのっぺりした印象になったのが惜まれる。

カトリック浦上教会はフレノ師と鉄川与助の造形を、その間に不幸な出来事がありながら、構造体を変えて100年以上にわたって守り抜いている。その景観はこの建物が秘めた多くの歴史とともに、この地域におけるランドマークというにふさわしいものである。

※ 年代に関しては以下によった。

カトリック長崎大司教区100年のあゆみ カトリック長崎大司教区編  
私たちの歩み 株式会社鉄川工務店履歴書

※ 本文資料の所在（不許複製）

図3～4 松尾有平氏（鳥取県在住）

写真1～6、図1～2 （有）鉄川進一級建築士事務所



写真1

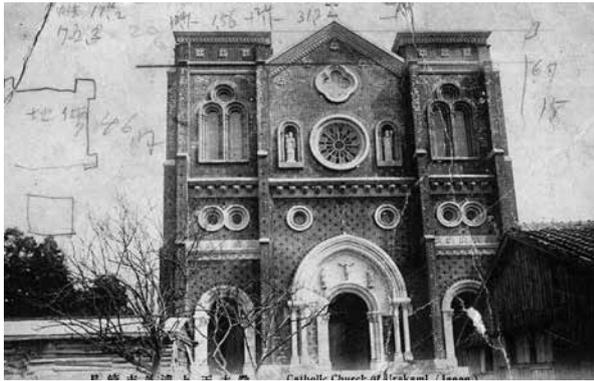


写真2



写真3



写真4



写真5

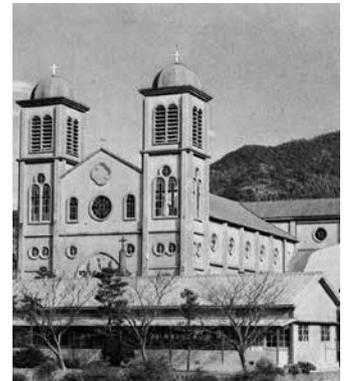


写真6



图1

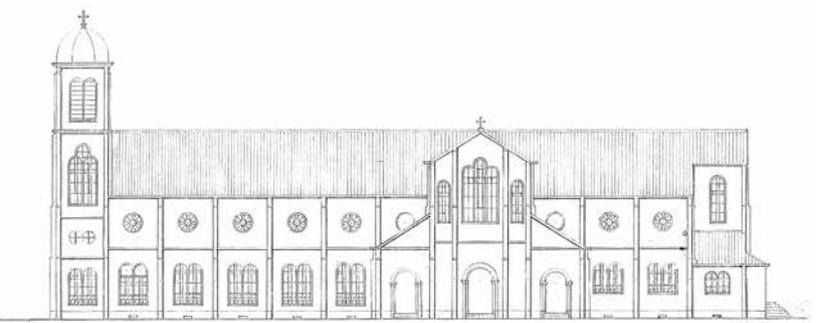


图2

戦前時 浦上天主堂復元図面  
 図面作成：松尾有平（元長崎総合科学大学）  
 2004年8月作成 2013年12月修正

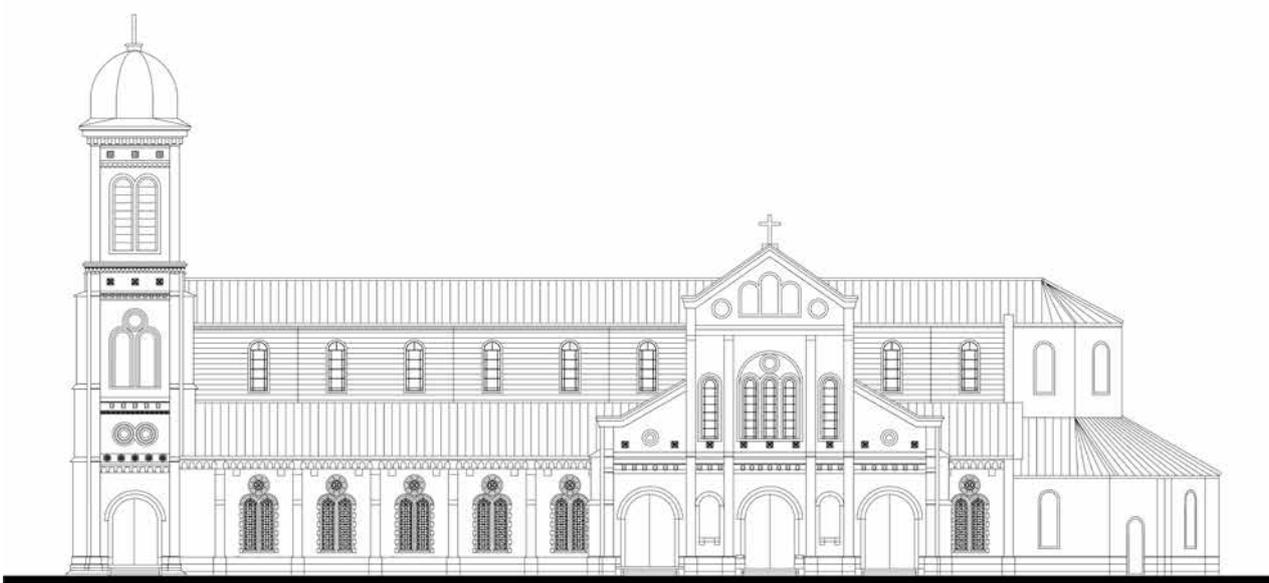


復元正面図



図3

戦前時 浦上天主堂復元図面  
 図面作成：松尾有平（元長崎総合科学大学）  
 2004年8月作成 2013年12月修正



復元側面図



図4